

ミャンマーで巡回診療

「医療の原点を感じた」

AMDA 2看護婦が活動報告会

医療ボランティア団体「AMDA」がミャンマーで展開している長期プロジェクト

エクトに参加した看護婦の活動報告会が二十五日夜、岡山市春遠町二の岡山国際

交流センターで開かれた。同国から帰国したばかりの女性二人の現地リポートに、大勢の市民たちが熱心に聞き入った。

紛争や災害などの発生時に派遣する緊急救援に比べて、関心が集まりにくい地道な長期プロジェクトについて理解を深めてもらおうと、AMDAが開催。小児病院開設や巡回診療など約十件のプロジェクトを展開してきたミャンマーに看護婦として赴任、このほど帰国した村中浩子さん(三〇)と、広島市在住の、俣崎希代子さん(三〇)熊本市在住の二人が報告した。

二人は、先月二十三日から約一カ月間、ミャンマー

ミャンマーでの活動を報告する俣崎希代子さん(左)と村中浩子さん

のメッティラ地区などに滞在。現地で巡回診療や栄養指導などに携わった。

村中さんは「注射針を他のごみと一緒に捨てたり、画びょう代わりに使っていた。けがや感染症のもとになる恐れがあるので、『針は危険』という認識を持ってもらうよう努めた」などと説明。俣崎さんは「検査試薬や高度な器具がなくても、さまざまな方法で診断を下していた姿をみて、『医療の原点』を感じた」などと話した。

また、産経新聞社提唱の「明美ちゃん基金」などをもとにAMDAが昨年十一月、同地区に開設した「ミャンマーこども病院」にも触れ、「新しい治療の機材を導入するなどして地域医療に貢献している。スタッフの数が足りないのが悩みです」と話していた。